|  |
| --- |
|  |



**『羅生門』**

**芥川龍之介**

**《小説を読むことについて》**

　高校に入学後、初めて「小説」を学ぶことになります。今までにも小学校や中学校、プライベート等で多くの小説を読んできたことでしょう。そのとき、必ず自分なりに感じたことや、小説の世界に想像を巡らせたことがあると思います。今回授業で取り扱う『羅生門』でも、ぜひ自分なりに考えながら自由に読み進めて下さい。小説を読むことの「楽しさ」を実感して欲しいと思っています。最後にみんなの感じたことを全体で共有いたします。「一人」で読むのではなく、「全員」で読むことの楽しさもきっとあるはずです。

**《『羅生門』の授業目標》**

一、下人の移り変わる心情を読み取ることができる。

二、『羅生門』を読み、自身で考えた感想やアフターストーリーを記述することができる。

三、クラスメイトと考えを交流し、共通点や相違点を把握することができる。

四、典拠作品と比較し、自身の考えをレポートにまとめることが出来る。

**≪授業の流れ≫**

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 六、『今昔物語集』と『羅生門』を比較し、レポートを作成する。 | 五、各グループで作成した劇を発表する。二回目の感想を記す。 | 四、アフターストーリを考え、劇の台本を作成する。 | 三、文章の読解を行う。（後半） | 二、文章の読解を行う。（前半） | 一、『羅生門』を読みウェビングを行う。初読の感想を記す。 |

**《ウェビング》**

《感想》

**《アフターストーリーを考える》**

初出のとき、結びの一文は「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」となっていたが、「下人の行方は、誰も知らない。」に書き換えられた。

**【学習課題・「～『羅生門』の続き～というテーマで脚本を作成し、演劇方式で発表する」】**

＊非現実的な世界を演出することは絶対に無いようにすること！

―脚本を書くための手引き―

１、時間設定　２、場面設定　３、登場人物の設定

１、時間設定《全グループ固定》

**○平安時代　○下人が羅生門を去った後**

２、場面設定（自分たちで考える）

　　例　京都の町　羅生門　主人の家　等

選択した場面→

３、登場人物の設定

○**ナレーションと下人は確定させること。**

　　例　老婆　主人　町の人　商人　盗人

選択した登場人物→

**アフターストーリーのおおまかな内容を左の欄に記入しよう！**

脚本の書き方（例）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 下人 | ナレーター | 下人 | ナレーター |
| 「そうだ、○○に・・・」 | 「下人は京都の町へ着いた」 | 「俺はなんてことをしてしまったのだ・・・」 | 下人は羅生門から出て後、京都の町へ走って行った。 |

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | **人物** |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | **セリフ** |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | **表現の工夫** |

**【実際に発表してみよう】**

＊セリフの棒読みではなく、登場人物の気持ちを考えながら言うこと。

→声の音量　・声の強弱　・読むスピード　・セリフとセリフの間

**一、劇の発表前に「登場人物」を紹介する。**

**（例）「百崎さんはナレーター、太さんは下人、小島さんは○○」**

**二、劇形式で発表を行う。（自信を持って堂々と！）**

**三、終了後、全員で必ず拍手を！（発表者に敬意を表して）**

**四、観劇した人たちが質問を行う。**

【自分たちの劇を自己評価してみよう】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | **ストーリー** | **発表** | **現実性** |
| **３** | **『羅生門』の内容を踏まえ、下人の人間性を適切に理解しながらアフターストーリーを構成している。** | **登場人物の心情を理解し、その場に適した表現の工夫を行い、堂々と演じている。** | **下人の人間性、下人を取り巻く環境を適切に理解し、『羅生門』の世界観を創っている。** |
| **２** | **下人の人間性を理解しながら、『羅生門』のアフターストーリーを構成している。** | **登場人物の心情を考えながら、その場に適した表現の工夫を行い、演じている。** | **下人を取り巻く環境を適切に理解し、『羅生門』の世界観を創っている。** |
| **１** | **観劇している人が『羅生門』のアフターストーリーと理解する構成になっている。** | **登場人物の心情を考えながら、表現の工夫を行い、演じている。** | **非現実的な要素を排除し、『羅生門』の世界観を創っている。** |

【『羅生門』と『今昔物語集』の「羅城門」を比較し、ミニレポートを書いてみよう】

★次の表は二つの作品をまとめた物である。両方を読み比べ、相違点を探してみよう。

　（相違点が空欄の部分は自分で考えて記入をする。無ければ空欄でも構わない。）

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  | 文章の終わり方 | 語り手 | 下人の引剥 | 下人が老婆の前に出た理由 | 門の付近 | 場所 | 時刻 | 死骸の女 | 老婆 | 年齢 | 仕事 | **相違点** |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 盗人 | **『今昔物語集』** |
|  |  |  |  |  |  |  |  | 羅生門 |  | 蛇の肉を売っていた女 |  | 若者 | 暇を出された下人 | **『羅生門』** |

羅城門〔今昔物語集〕

　今は昔、摂津の国わたりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かかりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人繁く歩きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかづり登りたりけるに、見れば、灯ほのかにともしたり。

　盗人、あやしと思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に灯をともして、年いみじく老いたる嫗の白髪白きが、その死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

　盗人、これを見るに、心も得ねば、これは、もし鬼にやあらむと思ひて、恐ろしけれども、もし死人にてもぞある、脅して試みむと思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「おのれは、おのれは。」と言ひて走り寄りければ、嫗、手惑ひをして、手を摺りて惑へば、盗人、「こは、何ぞの嫗の、かくはし居たるぞ。」と問ひければ、嫗、「おのれが主にておはしましつる人の失せ給へるを、あつかふ人のなければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の、丈にあまりて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と、嫗の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

　さて、その上の層には、死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。

　このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。

今は昔、摂津の国のあたりから、盗みをするために京に上った男が、日がまだ明るいので、羅城門の下に隠れて立っていたところ、朱雀大路の方では人が頻繁に歩いていたので、人通りが静まるまでと思って、門の下に待って立っていた時に、山城の国の方から人たちがたくさん来る音がしたので、彼らに見られまいと思って、門の二階にそっとよじ登った時に、見ると、火をかすかに灯している。

盗人は不思議だと思って、連子窓から覗いたところ、若い女で、死んで横たわっている女がいる。その枕もとに火をともして、たいそう年老いた老婆で、髪の白い老婆が、その死人の枕もとにいて、死人の髪の毛をかきむしって抜き取っているのであった。

盗人は、これを見ると、理解できなかったので、これは、ひょっとして鬼であろうかと思って、恐ろしかったが、もしや死霊であるかもしれない、脅して試してみようと思って、そっと戸を開けて、刀を抜いて、「こいつめ、こいつめ。」と言って走り寄ったところ、老婆は、うろたえて、手をすりあわせて慌て騒いだので、盗人は、「これは、どのような婆が、このようにしているのか。」と訊いたところ、老婆は、「自分の主人でいらっしゃった方がお亡くなりになったのだが、葬る人がいないので、このようにお置き申しあげているのだ。その御髪が、背丈を越えて長いので、それを抜き取ってかつらにしようと思って抜くのだ。お助けください。」と言ったところ、盗人は、死人が着ている着物と、老婆の着ている着物と、抜き取ってある髪の毛とを奪い取って、二階から下りて走って逃げ去った。

ところで、この羅城門の上の階には、死人の骸骨が多かった。死んだ人で、葬儀などができない死人を、この門の上に置いたのだった。

このことは、その盗人が人に語ったのを聞き継いで、このように語り伝えたということだ。

【二つの作品を比較し浮かび上がってきた相違点から、芥川龍之介が変更した理由（意図）

　を自分なりに考えてみよう】

ミニレポートの書き方例

《選んだ相違点「仕事」》

　『今昔物語集』では「盗人」なのに対して、『羅生門』では「暇を出された下人」に変更

されている。その理由について私は　～　だと考える。

ミニレポート

《選んだ相違点「下人の目的」》

『今昔物語集』では「盗みを働く目的がある」のに対して、『羅生門』では「盗人になるか

迷っている様子」に変更されている。原作では「盗みせむがために」と書かれているように、

下人は盗みを働くために摂津の国から都までやってきた。このように、下人は盗みを行う

という明確な目的意識を持っている。しかし、『羅生門』では、「「盗人になるよりほかに

しかたがない」ということを積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。」と

書かれており、下人は盗人になるか迷っている。盗人になるかどうか葛藤することで、

下人の「エゴイズム」を読み手に強く意識づける効果があると考えた。人の物を盗むという

利己的な思想も、生きるためには仕方がないかもしれないという葛藤があることで、

読み手は下人の心情に共感する部分も持てるであろう。最初から盗むという目的意識を

持たないことで、『羅生門』の魅力をより引き出すことにも成功している。

【目標がどの程度達成出来たか**振り返ってみよう！**】

一、下人の移り変わる心情を読み取ることができる。

【自己評価４・３・２・１】

二、『羅生門』を読み、自身で考えた感想やアフターストーリーを記述することができる。

【自己評価４・３・２・１】

三、クラスメイトと考えを交流し、共通点や相違点を把握することができる。

【自己評価４・３・２・１】

四、典拠作品と比較し、自身の考えをレポートにまとめることが出来る。

【自己評価４・３・２・１】

【『羅生門』の授業を通じて学んだこと、出来るようになったことを記入してみよう！】